

Title	E・D・ハーシュ, Jr. の「文化的リテラシー」論
Sub Title	
Author	翟, 高燕(Je, Koen)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2014
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.78 (2014. ) ,p.182- 185
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成25年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000078-0182">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000078-0182</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## E・D・ハーシュ, Jr.の「文化的リテラシー」論

翟 高 燕

### 1. 研究の目的

本研究の目的は、「文化的リテラシー」(Cultural Literacy)論と「批判的リテラシー」(Critical Literacy)論の交差関係を読み直すことである。

今日までのE・D・ハーシュ, Jr. (E. D. Hirsch, Jr.)の「文化的リテラシー」論に関する評価は主に、1980年代から2000年代までの社会状況を踏まえて行われているものである。これによって、「文化的リテラシー」論と「批判的リテラシー」論の対立構図が一般的に認識されている。本研究はハーシュの1960年代の研究蓄積とその後の理論との整合性を検討することから出発し、新たに「文化的リテラシー」論を問い直してみる。

本研究で試みるのは、単に「一元的」或いは「折衷的」なものとして「文化的リテラシー」を捉えるのではなく、「批判的リテラシー」と「交差的」なものとして捉えることである。すなわち「文化的リテラシー」論と「批判的リテラシー」論が「手を結んでいる」実態を明らかにすることである。

### 2. 研究の方法

これを明らかにする為に、四つの視点が重要である。第一に、理論の源流である解釈まで遡ること、教育学における解釈を明らかにすること。第二に、「文化的リテラシー」論の理論展開と実践運用の統合を解釈における循環の特徴から、理論と実践の関係を読み直すこと。第三に、「文化的リテラシー」論が形成された社会背景、なぜその理論をめぐって、活発な論議が展開されたのかを明らかにすること。第四に、「批判的リテラシー」論との「比較」を行うことで、「文化的リテラシー」論の構造をより鮮明に描き出すこと。他者という「鏡」で「文化的リテラシー」論を相対化すること。これらを行った上で、さらに中国での「文化的リテラシー」論と「批判的リテラシー」論の実践運用を考察することで、比較の意義を活かしていくこと。

この四つの視点から、本研究は「文化的リテラシー」論を理論展開と実践運用の関心から吟味しようとする。

### 3. 研究の内容

本研究は、研究の目的・方法に関する諸論と、先行研究分析に関する論考を柱とする〈序論〉、「文化的リテラシー」論への具体的な取り組みとしての〈本論〉、最終的なハーシュの「文化的リテラシー」論を再解釈する〈結論〉及び中国におけるリテラシー教育実践としての〈補論〉から成っている。〈序論〉の第二章では、アメリカにおけるリテラシー研究を概観し、これまで「文化的リテラシー」論の研究が、どのように歴史的変遷を遂げ、どのように論じられてきたのか、或いはまた、これらの議論を検討するにあたって、これまでどのような方法論的枠組みが採用されてきたのか、を明らかにする。それによって、上述した「文化的リテラシー」論を再構築する筆者の分析視角が、この分野の研究にいかなる意義を与え、いかなる貢献をなし得るのかが明らかになる。

そして、本研究では、ハーシュの理論を確立期・展開期の二つの時期に分類する。第三章では、「文化的リテラシー」論をめぐる論争の中でもこれまで注目されていなかったものについて検討を行うことで、彼の理論的背景を明らかにする。そこでは、「文化的リテラシー」論が形成された1980年代のアメリカを形成した社会背景、さらに二項対立の図式から、ディスコース関係まで、複合的な図式をもつ「批判的リテラシー」論の変遷を考察する。

第四章では、「文化的リテラシー」論の前提としての「コスモポリタニズム」(cosmopolitanism)及び「公正」理解を考察する。ハーシュの生涯の渡った「公正」理解、そしてこのような「公正」を実現したのは、国家や民族という限定した範囲を乗り越え、人類全体という世界の広い範囲を見渡す「コスモポリタニズム」であることを指摘する。さらに、この統合の上で、「文化的リテラシー」論における「文化変容」における関係とM・アップル(Michael Apple)<sup>1</sup>、P・マクラレン(Peter McLaren)の「社会的な夢の架け橋」という関係を比較することで、両論の関係における乖離と交差が分析されている。その後の第五章では、知識論・読解論の二点から、「文化的リテラシー」論の展開期が明らかにされている。ハーシュの「内容を知る」ことに対する「批判的リテラシー」論者の批判に対峙しつつ、ハーシュによって提唱される「文化的リテラシー」論における知の理解、特に、「方法を知る」こととしての理解・位置付けを中心とした検討を加える。その中で、「文化的リテラシー」論が「批判的リテラシー」論の一部と交差し、或いはそれを包括していることを論証する。さらに、「読み」方のアプローチから、「文化的リテラシー」論と「批判的リテラシー」論が分離から交差した関係へ変遷したことを考察する。

以上のような交差関係の理解を深めるために、次に1960年代までの解釈に遡り、とりわけ「文化的リテラシー」論と「批判的リテラシー」論の関係を形成した原因を読み解くことになる。第六章においては、「文化的リテラシー」論と「批判的リテラシー」論の対立、及び実践的側面におけるギャップの特質を把握し、「再現性」と「客観性」の本質におけるハーシュの評価こそが、すべての理論展開の原因であることを論証する。

理論的な接近及びその接近の原因を分析した上で、第二部では、実践的側面からコア・ナレッジ・カリキュラム(Core Knowledge Curriculum: 以下CKカリキュラム)を取り上げ、カリキュラム論及び成績向上の観点から検討が行われた上で、「コロラド州の生徒評価プログラム」と「北西教育協会」の試験においてCKカリキュラムで学んだ生徒の成績はCKカリキュラムを受けていない生徒と異なっていること、そしてCKカリキュラムを受けた優位・不利(な状態)生徒の成績ギャップが比較対象と異なることを検討する。

第一部と第二部の理論展開と実践運用での考察を踏まえた上で、考察の第九章で、「文化的リテラシー」論の理論展開と実践運用の乖離が存在していることが考案されている。この乖離の存在で、「文化的リテラシー」論と「批判的リテラシー」論の分離が導かれてしまった。すなわち、「批判的リテラシー」論は理論循環における消失、さらに理論展開と実践運用の間における乖離を無視することで、単に実践運用から理論展開を批判した結果と語られることになる。結論によれば、「文化的リテラシー」論と「批判的リテラシー」論の分離を導いたのは、この「文化的リテラシー」論における理論展開と実践運用の間における「意義」(significance)の消失であることが結論づけられる。すなわち、本研究は「文化的リテラシー」論に対する「群盲象を評す」のような視点を克服し、今日まで対峙関係として論ぜられてきた「文化的リテラシー」論と「批判的リテラシー」論の関係を交差した関係を読み直すこと

ができたとまとめられるだろう。しかし、このような理論展開と実践運用の乖離は、中国という場面において、どのようによく統合できるかを検証するために、本研究は、「意義」の循環における難点を克服するために、中国における現状整理を行う。この現状整理を、「文化的リテラシー」論の実践運用部分の応用基盤として位置づける。

#### 4. 研究の結果

本研究は、ハーシュの教育思想の構造・内容・特質と実践を解釈の関心から明らかにしようとした一試論である。この試論においては、「どのような事柄を検討する場合でも、その事柄の明白な特性だけでなく、あまり表面にはでていない、他の要素との関連を考慮した上で、その事柄を規定していく」<sup>2</sup>方針から、単にハーシュがリテラシーの問題について何を語っていたのかを解明するだけでなく、ハーシュの「文化的リテラシー」論を理論展開と実践現場の中に位置づけ、その文脈からハーシュのリテラシー論の理論展開・実践運用的意味を再考することを目指した。ここで、本研究で展開されたりテラシー論に関する分析作業の跡を振り返ってみよう。

第一に、本研究ではリテラシー論研究のための方法論的枠組みを提示した（序論第一章）。すなわち、今日まで教育学では注目されてこなかったハーシュの解釈という手法を用い、理論展開と実践運用の二側面から、複合的に「文化的リテラシー」論を考察するというものである。「文化的リテラシー」論による理論展開と実践運用の循環構図による「意義」の消失がある。「批判的リテラシー」論は「文化的リテラシー」論の循環における「意義」の消失、さらに理論展開と実践運用の間における乖離を無視することで、単に実践運用から理論展開を批判したことによって、理論展開における「文化的リテラシー」論と「批判的リテラシー」論の分離関係になったことが明確になった。

第二に、本研究は、「文化的リテラシー」論と「批判的リテラシー」論の間に存在する対立の克服をめざし、「文化的リテラシー」論の構造と内容及び特質まで探った。まず、その理論構造を成定期・展開期の二つの時期に分類し、展開期において、「文化的リテラシー」論と「批判的リテラシー」論の関係構図は、対立した構図から接近した構図へと変遷したことを明らかにした。歴史的な変遷に伴い、言葉と語彙を天秤にかけることによって「文化的リテラシー」と「批判的リテラシー」は「読み」の理論を展開してきたことが明らかになった。すなわち本研究は、今日まで「文化的リテラシー」論を「批判的リテラシー」論の批判対象として位置づけてきた、単純なイデオロギー的分析方法を乗り越えようとするものである。具体的には、「文化的リテラシー」の役割が解釈学的に論じられる際の、「再現性」と「客観性」の概念に着目することによって、「文化的リテラシー」論が、理論面において「批判的リテラシー」と同様の機能を以て展開される可能性を指摘した。

また、この意味でのリテラシー論とは、それぞれの時代の社会的背景によって姿を現すものであり、各時代に特有のリテラシー論がそれぞれどのような出現をするのかに注意しながら考察すべきことを論じた。このような自覚がないと、その各時代に特有のリテラシー論に対して、今日的な視点からのみ裁断してしまうことになる。従来までのリテラシー論、そして「批判的リテラシー」論による「文化的リテラシー」論の批判においては、この種の方法論的枠組みが十分に自覚されていたわけではなく、1990年代の関心から1980年代の「文化的リテラシー」論を一方的に評価しようとする方法が主流をなしてきたことを明らかにした。

第三に、上記のような方法論的枠組みに基づいて、この「文化的リテラシー」論の実践運用がどのよ

うに展開され、どのような効果があったのかを検討した。コア・ナレッジ・学校 (Core Knowledge Schools: 以下CK学校) と非CK学校間の比較、及び一つの学校を長期追跡することによって、比較的手法で「文化的リテラシー」論におけるコア・ナレッジ (Core Knowledge) の効果を検証した。最終的にこの実践運用と理論展開の関係を中国での事例を考察することにより、「文化的リテラシー」論の研究において補強的な役割を果たした。

本研究は、二つの循環、すなわち「理論」と「実践」の循環、そして「理論」内部における「著者」「テキスト」「読者」の循環に着目して、ハーシュの理論展開を考察した。そこから、二つのことを明らかにした。まず、ハーシュによる「文化的リテラシー」論と「批判的リテラシー」論は単に分離したものではなく、両者の間には交差した部分も存在している。その交差している部分は、解釈の源流に遡ることで明確に確認出来る。この解釈を考察することによって、ハーシュの「文化的リテラシー」論の全体像をより明確にできた。

そして、循環構図によって、ハーシュの「文化的リテラシー」論における理論展開と実践運用の総合的な関係を明らかにした。さらに、この理論展開と実践運用における循環的な関係によって、そのプロセスにおける理論の消失と実践運用の徹底的ではない部分が見えた。この消失によって、今日までの分離した研究を形成してきたのを論証した。

#### 注

- 1 アップルは自分が唯物論者・物質主義者の傾向があると自称し、社会現象学・ハーバーマス (Habermas) や、批判理論の混合したものから影響を受けたと述べた。(Apple, M. W., & Buras, K. L. (Eds.). (2006). *The Subaltern Speak: Curriculum, Power, and Educational Struggles*, New York, NY: Routledge.)
- 2 マイケル・W・アップル (著): 門倉正美・宮崎充保・植村高久 (訳) (1986)『学校幻想とカリキュラム』東京: 日本エディタースクール出版部, 250。

## W. ジェイムズ教育論の思想的基盤に関する研究

—「経験」概念の検討を中心に—

岸 本 智 典

### 1. 研究の目的と意義

本研究の目的は、19世紀の後半から20世紀の初頭にかけて活動した哲学者、心理学者であるウィリアム・ジェイムズ (William James, 1842-1910) の哲学思想における中核的考えを、彼の教育論との関わりにおいて把握し、そのような彼の考えの持つ教育学的な意義を示すことである。そのためにも、本研究ではジェイムズが伝統的な経験論や従来の心理学に対して行った批判的営為を「経験」概念の再構成の営みであったと捉え、彼の「経験」概念の特質を明らかにすることを試みる。その際、彼の思想形成の動因となっていたと見受けられる「辺縁」への視点に着目し、その内実を明らかにすることを目指した。

本研究は教育学研究であるが、ウィリアム・ジェイムズという研究対象の性質上、哲学・心理学・生物学等にまたがる学際的な研究となり得る。「教育」という人間の、複雑かつ本質的な営みを理解する